

日本のロータリアンに感謝

韓国・ソウル南 吳 善煥

去る一九九一年二月一九日、ロータリー韓日親善連絡委員会がソウルで開催されたとき、伊藤恭一元RI理事が日本のロータリアンによって拠出された、慈行会付設の秀峰再活院建築のための賛助金三四、〇三〇、五八七円を慈行会会長である私に伝達されました。

慈行会は、李王朝最後の皇太子であった英親王李王根さまのお妃、元梨本宮方子さまが社会福祉事業を実施すべく、一九六六年に心身障害者の教育と福祉を目的として創立された社団法人であり、現在障害青少年のための慈恵学校（初等・中等・高等部課程）を経営しています。一九九〇年三月、会長に私が就任し、李方

子さまの崇高な遺志を継ぎ意義あるこの事業をより活性化し、より広めるために一次的に付設職業輔導施設を建設することを決心し、同年一月着工しました。

総予算七億ウォンのうち、私財二億ウォンを出費しました。この消息を伝え聞かれた伊藤元理事が、日本のロータリアンの皆さんに、建設趣旨をお話なされたところ、多額の賛助金が寄せられ、総額一億九〇〇万ウォン（前記日本円の換算額）を私に渡してくれた次第です。

国境を越えて差し伸べられた愛の手、これこそわれわれロータリアンが「自分を超えた眼を」サプー会長テーマを、身をもって実践されたと思うのです。特に李方子さまの敬奇な運命を考え、同時に李方子さまの高貴な慈愛の善行を思い浮かべての皆さんの募金協賛は、今なお一部両国間に残存するわだかまりを一掃するのに役立つものと信じ、私は韓国ロータリアンを代表して皆さまに心から深く感謝する次第です。この快挙は永遠に韓日両国の友愛のきずなを、より強固なものとする確信して疑いません。

私は若いときから商売をしています。長い間、青少年指導育成のためのポイスカウト運動およびロータリー活動に、積極的に参与してきました。このことにこの上ない誇りと喜びを感じています。私の年齢も八〇であります。卒業の奉公として慈行会の仕事に全力を尽くすつもりです。幸いにも日本の皆さまのご協力と韓国ロータリアンの賛同により、小規模な

がら小ぎれいな再活院は一九九一年一〇月無事竣工しました。障害青少年たちに職業訓練を実施し、彼らに適切な職場を与えることは実に大切なことであると思っています。

あの日、前面に設けられた李王さまと李方子さまおふた方の胸像の前で厳肅に執り行われた賛助金伝達式は、私のみならず出席された韓日両国のロータリアン指導者皆の胸に深い感銘を与えたと思います。人類はひとつ——友愛の橋を架けよう」と叫ばれた向笠元RI会長のテーマの実践であると信じております。伊藤元理事をはじめ日本のロータリアンの皆さま本当にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

（一九九一七〇年度ガバナ）